



第38号
2016・6・12発行
金光教教学研究所

資料に拓かれて、いま、そしてここから

第三部部长 兎山 真生

本所では、昨年も新しい資料をいろいろ受け入れた。この中には、今年の教報三月号に紹介された教祖在世時の書類や管長家関係の資料(約三三〇点)も含まれている(これについては、本号後掲の白石淳平所員の「平成二七年度研究報告を振り返って」をご覧ください)。

新たな資料の出現によって盛り上がる所内にあつて、いまこの時に在職しているということ、を改めて考えさせられた。貴重な資料と巡り合う特権的喜びは、研究所に在職していればこそ享受することができる。そしてその喜びは退職によって失われる。いつとは知れず、それでいてさほど遠くない喪失への縁に居ることを感じる時、いま許された喜びを存分にとの願いを強くさせられている。

*

ここ数年来、私は「戦後教団史」に取り組んでいる。教団史研究では、時期区分の一つとして

「戦後」という表現を用いてきている。昨年は「戦後七〇年」だった。七〇年前と現在では人びとの生活の様子や教団を取り巻く環境など、随分違うものがある。また、今年には明治一五年の「信条の聞き書き」から数えて一三四年である。教団の始まりをいつと見るかという問題はあるものの、いまや「戦後」は教団の歴史の約半分を



戦前の風景(客殿付近の献燈・昭和8年)

占めていると言っても過言ではなからう。

いつからか「戦後」の〈区切り〉ということについて関心を持つようになった。この点に關して、「二課題」設定(昭和四三年)の前後をはじめ、教祖百年祭(昭和五八年)等々の意見を耳にしたことがある。いずれ共通理解が形成されていくにも、研究を通じた歴史認識の更新・展開が不可分であろうし、またそれは独りで焦って出来るものでもない。このことは分かっているつもりである。それゆえにか、あと許された時間のことが頭をよぎれば、目の前の取り組みに対する意気が下がることもある。

どうか雑念を払拭しようとしたある時、ふと、自らの「戦後教団史」の関心の発端となつた、約二〇年前の「第九回教団史に関する懇談会」(平成九年九月)を思い出すことがあつた。この会合のテーマは「戦後教団の動向について―昭和三八年から四八年までを中心として―」であつた。当時、入所三年目の助手の私は、先輩から指示された通り、資料庫や図書室から資料を持って来る等々、会合に向けた準備を手伝っていた。その過程で「全教参加」という言葉をたびたび目にした。そして、その言葉と表裏にある中央と地方の關係の有り様となつて現れている、多くの知恵と工夫を傾けてなお解けない(溶けない)本教にとつての「何か」に、言い知れぬ不安と期待を抱いた。私自身の懇談会当日に臨む

関心はこの一点であった。そして、懇談会後も関心はそのまま残った。

それからしばらく、「戦後教団史」以外のテーマに取り組みながら、心のどこかにはあの時感じた不安と期待をいつか確かめたいという思いがあった。そして近年になって取り組み始めた。始めるに当たって研究的目算のようなものがあつたわけではない。あつたのは「資料に即して、どこまでか」という思いだった。それはこれまで研究所に在職しながら、資料に問いかけることで、研究が、そして自らが拓かれてきた体験に発する思いである。

さて、いま、取り組みの進捗状況としては、あの時感じた不安と期待をいまだ確かめられていないし、「戦後」の全体性把握にもまだまだ遠い。だからこそせめて、資料に即して、一つ一つ歴史実態を浮かび上がらせ、確かめて行く。こう言えることの喜びを見失わずに歩んで行きたい。

(徳島・佐馬地教会)



ベランダ防水工事
(平成27年9月)

★平成二八年度の計画★

本年度は、所長以下、総勢一六名にて出発することとなりました。以下、主な取り組みを紹介いたします。

【第九回教学に関する交流集会】〈実施済み〉

五月一九日(木)、兵庫県北部教会連合会(於八鹿教会)の協力を得て、「教祖さまの思いにふれる―教祖さまの直筆をみながら―」をテーマに教学に関する交流集会を開催しました。



第9回教学に関する交流集会

【第五回教学研究会】〈予定〉

六月一七日(金)〜一八日(土)に教学研究会を開催します。今年、第一日に研究発表、第二日の全体会では「時代への眼差しと信仰」をテ

マに、嘱託中里巧氏(東洋大学教授)による講演、講演へのコメント・全体討議を予定しています。



中里 巧氏
(平成27年度研究生講座より)

【第一〇回教学に関する交流集会】〈予定〉

一昨年、昨年に引き続き、九月一七日(土)、霊地信徒会にも呼びかけつつ、「教えを生活に生かすには」をテーマに、霊地にて教学に関する交流集会を開催します。

【第一七回教学講演会】〈予定〉

布教功労者報徳祭時(二月)に、紀要五六号の研究成果を題材にした教学講演会を開催します。

【紀要論文講読セミナー】

これまでの研究成果を全教の信奉者と共に学ぶ

機会として、昨年から紀要論文講読セミナーを開催しています。今年
は、紀要二〇号までの中から四本の論文を取りあげています。

ご参加の場合は事前にご連絡ください。

場所 金光北ウイング(光風館研修室)

時間 各日 一三・〇〇～一四・三〇

〈実施済み〉

第一回 五月二〇日(火) 担当 大林浩治

竹部教雄「実意丁寧神信心」考(第一五号)

〈予定〉

第二回 七月二〇日(日) 担当 白石淳平

福嶋義次「二乃弟子もらいうけをめぐる金神と天照皇大神との問答

—伝承の世界と信仰の世界—(第二〇号)

第三回 八月二〇日(水) 担当 高橋昌之

福嶋義次「理解」のことばについて

—金光大神理解研究ノート—(第一六号)

第四回 九月二〇日(土) 担当 岩崎繁之

金光真整「金光大神御覚書の読み方について」(第九号)

○

この他にも、教団付置研究所懇話会第一五回年次大会(於中山身語
正宗教学研究所)や、諸学会への参加、さらには来訪者の受け入れ、
資料照会に応じること等を通じて、広く教内外の問題関心との連関を
深めながら、研究内容の拡充、展開に努めてまいります。

また、継続して研究に連動した資料の収集・管理を進めるとともに、
各種研究講座、研究発表等の充実を図り、より一層、問題意識の先鋭
化、方法の研鑽、研究領域の開拓に培って参りたいと考えております。

平成28年度研究題目

〈第1部 教祖研究〉

所員 大林浩治

「神の頼み」に見る価値転倒 —貨幣経済秩序との関わりで—

所員 岩崎繁之

金光大神事蹟資料についての基礎的研究 —金光宅吉筆写資料「別の帳」箇所への注目から—

所員 白石淳平

「金光大神御覚書」への視座 —「語り」の構造に注目して—

〈第2部 教義研究〉

所員 高橋昌之

「先祖」「精霊」の意味世界 —「覚書」「覚帳」及び「理解」等における死者の感取に注目して—

〈第3部 教団史研究〉

所員 兎山真生

昭和二十年代における教務と教会の関係理解の諸相

—「教制審議会」の「教会論」に注目して—

所員 山田光徳

大正期における教会の信仰実態 —布教史資料を用いた基礎データの作成を手がかりに—

★提

研究員

宮下寿美

★言

リレー



アは、私が初めて訪れた二〇〇三年に比べて、目に見えて変化してきています。首都プノンペンの人口は、二〇〇五年に九〇万人だったのが、二〇一五年には二〇〇万人に達しました。この十年間で倍以上になりました。この秋には、日本からプノンペンへの直行便の運行もはじまります。しかし、訪問することに、交通渋滞が激しくなっており、インフラ整備が、人口増加と経済発展に追いついていません。また、プノンペンのスラム地域は拡大し続けており、自由主義経済の負の側面、貧富の格差の問題が大きくなってきています。

昨年一一月に、絵本を送る活動のスタッフ達

とカンボジアの支援地域の視察に行き、プノンペンでスラム街を訪れました。毎朝市場で貝を仕入れて、市街へ売りにいく男性にインタビュアができました。彼は、「知人から仕事の話をきき、家族でプノンペンに移って来た。それまでの生活に比べ、収入は増えたので満足をしている」と話してくれました。彼とその家族はバラック小屋に住み、生活排水が流れ込む近くの川からは、異臭が立ちのぼっていました。ゴミがあちこちに廃棄され、生活環境の劣悪さを感じました。それでも、彼らは、それまでの生活に比べると格段の収入が得られることに満足をしているのです。

スラム地域訪問後に、私たちを案内してくれた現地NGOのスタッフに、参加者の一人が質問をぶつけました。「自分は、スラム地域の環境の悪さにたじろぎました。しかし、あなたはどの方にも自然に振る舞い、治療の方がいればその身に触れ、赤ちゃんには優しい眼差しで手を差し伸べていました。どうして、普段と変わらずに、対応できるのですか」と。彼は、「自分は、どんな人にも平等に接したい。生まれた環境は違っても、みな同じ人間なのだから。必要なのは教育です。教育を受けられれば、スラムや貧しい村に住む人々の生活は変わっていきます」と答えてくれました。彼の言ってくれたことは、参加者が現地で見聞きしたことと生まれてくる「どうして?なぜ?」への答えを見つける重要なメッ

セージになりました。スラム地域の実情を五感で感じることは、テレビや本から受ける刺激とは違って、強いインパクトを与えます。カンボジアの人々や彼らの生活に直に触れて、私たちが持っている観念の整理をするきっかけになったことは、現地訪問の大きな成果だと思えます。

教祖にまみえた直信諸師の、教祖から受けとった刺激はとても大きく、インパクトが強いものでした。近藤藤守師は、晩年でも教祖の話を涙を流しながらされたと聞きます。若い時に数年間接した教祖から得た刺激は、それ以後の師の生涯に生き続けたのでしよう。お道のご信心は、教祖のご信心を求めて現していくことですが、私たちは教典や直信の遺された書物によってではなく、教祖にふれることはできません。頭でわかっ

ていても、心をゆさぶる衝撃的な感覚はなかなか生まれてきません。私は、カンボジアスタッフの話聞いた時、「人の身が大事か、わが身が大事か。人もわが身もみな人」「天が下に他人ということはなきものぞ」と仰る教祖が、自分の前に現れたように感じました。一三三年の時間を越えて、教祖と自分が結ばれたのです。生活のなかの出会い、発見は、信心成長の大切な原動力になると改めて感じさせられました。そして、私たちは、次代へ教祖からいただいた熱い衝撃を伝える役割を担っていかねばならないのです。

(大阪・平野教会)

平成二七年度

研究報告を振り返って

第一部所員 白石淳平

「よつ千両役者！」文政十年、大谷村では、氏神の祭日に「いもせ山（妹背山）」という芝居が催されました。実は、当時十四歳だった金光大神は、そこで「ふか七（鱧七）」なる役を演じ、観衆から称讃の声を浴びたということです。後年、金光大神は、村人を前に芝居を演じた経験に思いを馳せました。ここからは、芸能といった諸文化の刺激を受けつつ営まれた村落生活、またその中に生きた金光大神であったことが想像されます。

さて、このエピソードは、昨年教団に提供された資料のうち、金光大神の事蹟に関する内容を所収した帳面（金光宅吉による筆写本）に記されていたものです。

今回筆者は、「覚書」安政五年の「もらい受け」を、神楽台本「天岩戸開神能書」における金神登場の様相との関わりで検討しました（「安政五年の「もらい受け」に窺う神々との交渉―村落祭祀における神楽の様相との関わりで―」）。そこから、神話や説話等、同時代的に流布していた「物語」との共通性や違いを通じた「覚書」

への論究（物語論的解釈）の可能性に言及することとなりました。そうした観点を後押しする手がかりの一つとなったのが、新資料の記述であつたわけです。

右に紹介した新資料は、約三三〇点に及ぶ資料群の一つです。現在その資料群の整理及びび解読作業が進められており、従来の研究を改めて問い直す可能性を示唆する内容が、徐々に浮かんできています。

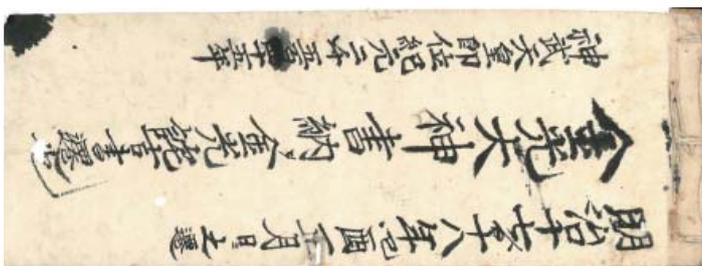
今回、そうした新資料の様相を扱った報告の中から取り上げたいのが、岩崎繁之「お知らせ

「事覚帳」の生成について―金光宅吉筆写本翻刻を通じて―」です。

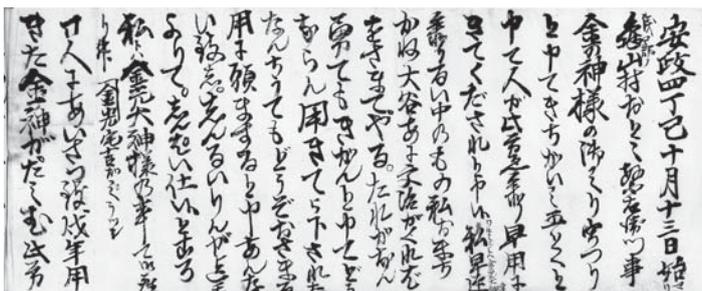
この研究は、記述の粗密や筆致、貼り紙や書き込みのありようといった表記形態への着目から、「覚帳」の性格を資料論的に究明しています。本報告では、先に触れた金光宅吉の筆写本のうち「覚帳」の箇所を翻刻、及び「覚帳」原本との比較を通して、「覚帳」の性格究明への手がかりが示されました。さらに、その筆写の様態からは、「覚書」が、その原本自体を忠実に再現したものである可能性についても言及されています。



調査実習（備中神楽）



金光大神書納ヲ金光宅吉書遷也（表紙）



同上（部分）

す。また、起筆時期や文飾に関心を向けてきた従来の研究を、表記形態をも含めた帳面全体としての、「覚帳」生成への論点から見直すことにもなっています。

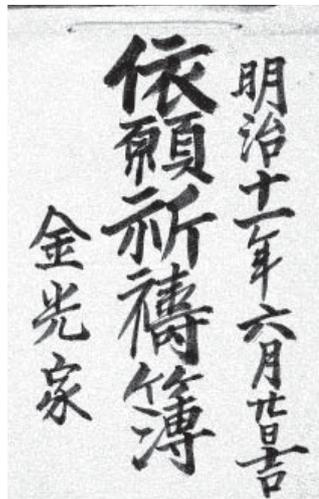
新たに受け入れられた帳面類、また「歳書帳」等既存の資料も含め、他資料との比較分析を通じて浮かぶ「覚帳」「覚書」の資料的性格が、今後、これまでの研究の見直しを促しつつ、新たな解釈の可能性に培われていくことが期待されます。

以上のように、新資料の登場によって既存資料への視点が再活性化される一方で、資料から浮かぶ新たな歴史実態が、本教信仰への理解に問いを投げかける場合もあります。

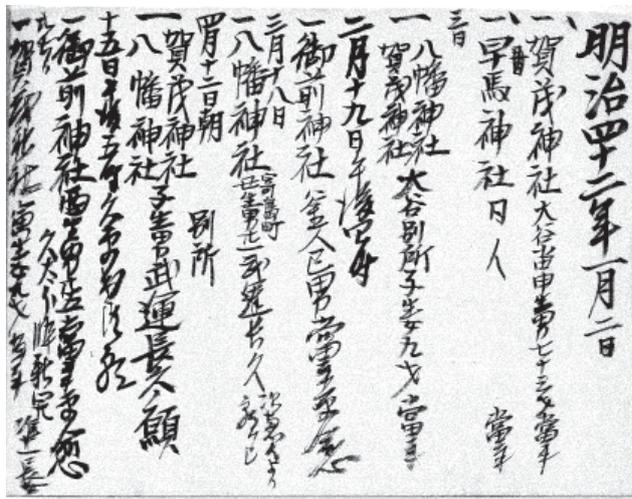
そうした側面から次に紹介したいのが、教団史的関心から「金之神社」や神職金光家に関する資料に目を向けた、山田光徳「神道金光教会期における儀式執行の諸相―「依願祈禱簿 金光家」を手がかりに―」です。

これまで、神道金光教会については、主に教団組織化や布教合法化の視点で論じられてきました。対して本報告では、儀式への注目により、当時の信仰営為の実態究明が試みられています。特に、そこで取り上げられた「依願祈禱簿」には、金光萩雄らによって行われた「祈祷」の様相が窺われ、本教初期に人々が助かりを求め、その願いを引き受けようとした営みが明らかにされています。当時の時代状況と、そこに生きた人々

の要請との関係から、教団草創期の信仰のありようを捉え直す試みとして、今後の展開が期待されます。



依願祈禱簿 (表紙)



同 右 (部分)

さて、この他、平成二十七年度は、新たに二人の助手が加わり、計十本の研究報告が提出されました。「千両研究者」なんてもちろん言われませんが、研究報告提出当日には、面白い、難しい等々、色々な反応を頂きます。毎度一喜一憂させられ、ひとまずの解放感と共に、検討会へ向けて身が引き締まる思いにさせられるのです。

初めての研究報告となった浅田千枝、森川育子の両助手は、それぞれ、ハンセン病療養所における金光教求信会の営み、戦後教団における手続き関係をめぐる議論をめぐって、信仰理解への新たな手がかりを模索する意欲的な報告をまとめました。いずれも、これまでの教学研究において取り上げられてきたテーマではありません。しかし、改めて今の視点からそこに光を当てようとする試みが生まれてくることは、本教信仰を常にその時々状況から問いに付し続けていく教学研究の欠くことのない作用であるように思います。このことは、紙数の関係上紹介することができなかつた他の各報告も同様であり、その萌芽として、今後が楽しみな両助手の取り組みでした。

この度の資料との出会いも、以上のことを願われてのことであると胸に留め、なお一層、研究内容の充実を図ってまいりたいと思います。

(愛媛・南宇和教会)

初めての研究報告検討会を

経験して

今回、初めての研究報告検討会を経験した新助手二名の感想を掲載します。

第二部助手 浅田 千枝

研究報告検討会では、各日一人ずつ、トータル二週間をかけて検討が行われた。私の研究報告は、邑久光明園金光教求信会に関わってきた人々の語りに注目することで、個々の人が抱え持つものと信仰との関わりについて問いの抽出を試みる、という内容だった。私の検討会は二日目に行われ、これまでの取り組みでの悪い癖や苦手意識を持っていった部分が浮き彫りになった。例えば、質疑に対しその場で応答することばかりに必死だったが、一旦自分の中に引き受けて考えてみるようアドバイスを頂き、何を意図した検討かも含めて、深く考えることの大切さを実感した。また、教学の課題として、問いを問うべき形にすることについても検討を受け、一所にじっくり止まって考えるための解釈の方法を身につけていく必要性も感じた。先生方の検討会を経ていく中では、私自身の研究を視野に入れつつ、感覚的に興味や違和感を抱いた部分から展開して検討の言葉に

していくようになり、単なる質問に終わらない発言が出来ていったと思う。

全体を通しては、各々の研究が網の目のように関連し合い研究所という大きな構えになっていくこと、そして、その中に自分をどう位置づけることができるのか意識する機会になった。今後は、これらの経験を糧にしつつ、研究に取り組んでいきたい。

(兵庫・葺合教会)

第二部助手 森川 育子

初めての研究報告検討会は、発言の内容を理解することに精一杯であったり、どうすれば質問できるのかと焦っていた。自身の研究報告の検討会では、資料の見方などの指摘を受けて、自身の思考の幅の狭さを実感した。そして、思考の幅を持たせるためにはどのような点に注目していくと良いのかを学ぶことが、その期間を通して少しかるようになってきたと感じる。それは、先生方の検討の様子を見ることで、質問をするためには、その論文の何が、何故気になったのかを自分が理解して、相手にどのように聞くのか、ということが必要であるという点だ。特に、何故聞きたいのか、自分の興味関心が何処にあるのか分かっていなければ、質問は成立しない上に、相手にも通じないものとなってしまおうということを理解した。

また、検討会中に聞きたいことがあっても、自分が質問するときには言葉が出て来ず、口惜しい思いの連続だった。けれども、その思いで先生方の検討を聞くことで、自分の中の整理のついていない認識に気付きを得たように思う。ことに、お互いの研究に対する理解や関心を広げていこうとする意欲が、検討会の大元にあるのだと分かり、その姿勢が研究の考察や視野の広がりや深まりに繋がる要点だと感じた。研究所での、これまでとは異なる経験を重ねながら、学んだことを見失わないように研究に取り組んでいきたい。

(奈良・田原本教会)



竣工間もない客殿正門（昭和6年）

研究所の思い出

《1》

支えになった『広前歳書帳』と掃除

元助手 太田真明



か、私の場合、文章を書くのが苦手でした。

それなのになぜ入所したかといいますと、研究以外の「目的」があったからです。この目的は達せられませんでした。能力が足りないと感じるに至り、挫折したからです。

この目的が失われた後は、研究目的の入所ではありませんでしたから、教学研究所にいる理由を見いだせず、進路が見えなくなりました。

教学研究所では、研究報告の検討会が開かれます。検討対象は、執筆した論文ばかりでなく、生活態度万般にまで及びます。日常でも、終業時刻後、お酒を飲みながらの討議もありました。このときには、個人批判も飛び交います。

助手の私も、この討議に努めて参加するように言われました。意見を言うように強制されるこ

ともあり、何も言えないこの時間は苦痛でした。

教学研究所にいる存在理由がはつきりしないまま、まるで所内に潜む批判から身を守るように、自分の殻にとじこまりました。

このような状態のとき、二つのことに取り組みました。

まず一つは、研究です。

何を研究していいのか分からなかった頃、手を差し伸べてくださったのが金光和道先生です。

教祖様の御祈念帳である「金光大神広前歳書帳」(以下「広前歳書帳」と略す)に記された特定の人物を研究してみたらどうか、とご提案くださったのです。

「広前歳書帳」には、一打ち書きで、名前、称号、干支、場所、願いごとなどが記されています。私の研究は、一打ちで記された内容を、「覚書」や「覚帳」、伝承資料を参考に人物を特定し分析することでした。

金光和道先生は、解説本ではなく、教祖様直筆のコピーされた原本を用いて研究するよう勧めてくださいました。

初めは、研究報告に向けて時間が少なく、原本は読めないと思っていました。それでも、解説本を頼りに、原本に触れている内に、字を判読できるようになります。嬉しくなって研究に没頭できるようになりました。

二つ目は、退所するまで続けた毎日の玄関掃

除です。朝早く出務し、玄関の床を箒で掃いて、モップで拭きました。なぜ毎日玄関の掃除をするようになったのか、今となっては思い出せません。ただ、一つのことを続けている内に習慣になり、この掃除が研究所にいるアイデンティティになったのかもしれない。

研究所は、論文執筆の動機ばかりでなく、行動の理由を重要視しました。そのため、研究成果が上がらずに掃除をすることで認められたいのか、と批判されても続ける、という意志を貫こうとしたのを覚えています。

もともと、毎日の掃除について批判する方はおられませんでしたが。

教学研究所内では、限られた職員の方としか、自然体で話せませんでした。所属した第一部内でも、金光和道先生始め他の先生方が、心配して語りかけてくださいました。ここは、殻を破ってでるチャンスだ、と思っても、実行できませんでした。元の木阿弥のようで、とてもがっかりしました。このようなチャンスが何回かあっても、結局殻を打ち破ることができませんでした。

当初の目的を失った教学研究所内で支えなくなったのは、「広前歳書帳」と毎日の掃除でした。退所後は、毎年本部への年頭参拝の際、教学研究所に上がっています。理由は、在所中にご迷惑をお掛けしたお詫びとお世話になったお礼の気持ちなのです。(長野・諏訪教会)

研究所の思い出

《2》

研究所で学んだこと

元主事 梁瀬美代子



私は、教祖百年大祭の御年からの三年間、資料室での御用に用いていた。

まず手がけたのは、小野家文書の原本の複写、製本の作業であった。

文書は虫食いだらけで、触るだけでぼろぼろと崩れ、広げようものなら、粉々の紙くずのような状態になった。複写後、筆跡をつなぎ合わせて復元していくのだが、文字も虫食いも迷路のようで、つたない文書解読の技を駆使して悪戦苦闘した。数も膨大で、資料化が急がれたため、来る日も来る日も複写に明け暮れた。

この文書を解読されていた金光和道先生は、よく「大事なものじゃから優しゅうしんせい」と手ほどきしてくださった。あの虫食いの紙を簡単に、ぺらっとはがし、ふわっと広げられるのである。まさに神業であった。

ある日、「昔の人は早ように嫁入りしよったと思っじやろうが、二十五、六の独身の人もようけ

おるんじや、今と変わらんのんじや」と文書の一部を広げて見せてくださった。これは独身女性へのエールだろうと思っていたが、後に紙切れ一枚に、貴重な情報が詰まっているのだと教えてくださったのだと気付かせていただいた。

また、白神教監時代の資料収集時のことである。資料室員の堤先生、千秋先生と一緒に白神邸二階(当時)にて、書類を中心に搜索していた時の事、堤先生は黙々と搜索されていたが、私と千秋先生は、調度品に心を奪われ品定めしてふざけてばかりいた。作業が終わりかけた頃、二人同時に、急に肩から背中にかけて重たくなったのを感じ、御霊の働きではないかと青ざめたこともあった。

携わったものは、研究所蔵物のごく一部に過ぎないが、その一つ一つに、色々な物語が詰まっていて愛おしいとさえ思う。又それが、研究のベースになるのだと思うと、貴重で得難い経験をさせていただいたと有り難く思う。

野球チームの名前をブレインズといった。御用が終わってから他機関との試合に、マネージャーとして同行して、スコアブックに記録していた。野球のルールに詳しくないので、たがいエラーと記録していた。試合後の反省会では、ご想像にお任せしたい。

思い出は尽きないが、何と言っても先生方の愉快で豪快な飲みっぷりは、忘れられない。当

時は若かった女性同士でにぎやかに、はしゃいだ事もとても懐かしい。

寛大に見守ってくくださった先生方には感謝の気持ちで一杯だ。

いつかお会いして楽しい思い出話をしたと思うっていたが、帰らぬ人となられた方もいる。もう叶わぬこととなった想いは、思い出を一層貴重なものになっている。(兵庫・坂越教会)

案内

第一〇回 教学に関する交流集会

地方在住者との討議、意見交換の場を通じて、教学研究の意義、役割りの周知並びに教学研究に対する要望を徴するべく開催します。

- 一、日時 平成二八年九月一七日(土)
- 二、テーマ 「教えを生活に生かすには」
- 三、会場 金光北ウイング

(やつなみホール)

参加対象は、主に一般信奉者です。身近な方への参加方にご協力ください。

彙報

(平成二七年六月一日)

二八年五月三二日)

▲ 人事関係 ▼

一、職員(教団職員)

○教師浅田千枝、同森川育子、一〇月一日付で助手に任命。

○教師成田明信、一〇月一日付で書記に任命、同日付で資料室員に指名。

○部長児山真生、三月三一日で任期満了、翌四月一日付で再任(第三部長に指名)。

○助手山田光徳、四月一日付で所員に任命(第三部長代行に指名)。

○書記成田明信、五月一日付で本部教庁布教部に異動。

二、研究生

平成二七年度

○研究生片岡義智、浅田千枝、成田明信、森川育子、九月三〇日で委嘱期間満了。

三、嘱託

○嘱託渡辺順一、六月三〇日で委嘱期間満了、翌七月一日付で再度委嘱。

四、研究員

○研究員松岡光一、同宮下寿美、九月三〇日で委嘱期間満了、翌一〇月一日付で再度委嘱。

○教師西村明正、同服部貴子、一月二〇日付で研究員を委嘱。

五、評議員

○評議員松沢光明、二月一九日で任期満了、翌二月二〇日付で再任。

※五月三一日現在

所長一名、部長三名、幹事一名、所員二名、助手四名、事務長一名、主事三名、臨時御用奉仕一名(計一六名)、嘱託七名、研究員八名、評議員五名。

☆ おめでた ☆

結婚

○助手山田光徳は、一〇月一日、大坪光世さん(福岡・合衆)と結婚。

出産

○書記成田明信・恵理夫妻に、一月八日、長男 柁亮くん誕生。

○主事中西教幸・美由祈夫妻に、一月一五日、三男 男佐意くん誕生。



SAKAMICHI

今号も無事発行することができました。執筆のお願いを快くご承引頂き、寄稿して下さいました皆様に御礼を申し上げます。

さて、昨年九月、営繕で、雨漏りの激しかった洋館ベランダの雨水集合升と縦樋の接続箇所を修理していただきました。ベランダ防水シートと雨覆いも、二三年ぶりに張り替えられ、ベランダ周りは、新築のような装いに生まれ変わりました。本年一月には、文化財登録制度に基づき、浅口市の教育委員会と文化財保護委員会が中心となって、文化庁から文化財調査官が派遣され、研究所の施設見学が実施されました。参加者からは「建築当時の照明器具や調度品が残っているのは貴重だ」、「大屋根を支えるトラス構造の木組みが特徴的だ」、「戦前にこれほどの洋風建築があったとは驚きだ」等の感想を聞くことができました。昭和五年一月に客殿として竣工してより、八六年の風雪に耐えた建物です。長年使用させていただいておりますことに御礼申し上げます。これからも大切に維持していきたいと思えます。

発行・印刷 金光教教学研究所

岡山県浅口市金光町大谷一四四一の三

電話(〇八六五)四二一三一七

FAX(〇八六五)四二一三一九